

3. 「広義の中世」の出現期(4世紀後半～8世紀後半)

3.1 西ローマ帝国の滅亡とフランク王国の誕生

テオドシウス1世治世下のローマで中央＝都市部と周辺＝属州が同化して外部＝版図外が亜周辺化し、他方、貨幣経済が具現する。貨幣経済下で物品貨幣(家畜や穀物等)の交換が容易になり、ローマとサーサーン朝ペルシャの交易が活発化した。

だが、亜周辺の民衆＝ゲルマン人はローマの最高法規＝アタナシウス派キリスト教に帰依しない。他方、略奪は物品貨幣より財貨のほうが容易である。テオドシウス1世後のローマ皇帝も金貨を発行し、ローマ金貨とペルシャ銀貨の交換が続くが、貨幣経済はサーサーン朝ペルシャとの交易だけでなくゲルマン人の略奪も促進する。そして5世紀中頃、フン族が西方に移動し、ゲルマン人の大移動がはじまる。

その頃、ローマは軍政と民政の両面で東西に分裂していた。すなわち、「西ローマ」と「東ローマ」に分裂していた。そしてフン族に押し出されたゲルマン人(西ゴート族やヴァンダル族、フランク族、アラマンニ族、ブルグント族等)がライン川を越え、西ローマ領に侵入する。

(フン族＝北匈奴説を提唱する歴史家がいるが、匈奴が北匈奴と南匈奴に分裂したのは1世紀中頃である。他方、フン族がヨーロッパに登場するのは4世紀後半である。300年以上の空白があるため、フン族が北匈奴であったか否かはわからない。しかし4世紀後半、フン族がサルマタイ人の末裔＝アラン人を追い出しキプチャク草原を占領したのはほぼあきらかである。そして5世紀中頃、西方に移動する。移動の理由は不明である。451年のハーレー彗星を見て移動したとの説もあるが、定かでない)

401年、族長アラリック率いる西ゴート族がイタリア半島に侵攻する。そして410年、ローマ市を略奪した。略奪後、アラリックが死去し、西ゴート族は西ローマと和睦する。そして418年、アキテーヌ地方(南フランス西部)とイベリア半島に移動し、西ゴート王国を建国する。

西ゴート族が移動する前にヴァンダル族がイベリア半島に移動して定住している。おそらく、西ゴート族はヴァンダル族を支配するつもりでいた。だが、ヴァンダル族は支配から逃れる準備をしていた。432年、族長ガイセルリック率いるヴァンダル族がジブラルタル海峡を横断し、北アフリカに移動する。北アフリカ移動後、ヴァンダル族は「海賊」に変貌した(ガイセルリックが、どのようにして部族の「エクソダス」や海賊行為に必要な船舶を調達したかは不明である)。

439年、ヴァンダル族はカルタゴを占領して北アフリカを支配する。さらにシチリア島やサルデーニャ島、コルシカ島も支配する。そして455年、イタリア半島に上陸し、ローマ市を略奪した(ちなみに、当時の北アフリカは西ローマ領であるが、エジプトは東ローマ領である。エジプトでは、東ローマ軍が堅牢な守備体制を築いていた。ヴァンダル族はエジプトに侵攻できない)。

それでも西ローマはイタリア半島とその周辺を護持して生き残る。だが476年、傭兵隊長オドアケルが西ローマ皇帝を廃し、「イタリア王」に即位する。歴史家たちは、オドアケルがイタリア王に即位した場面でも西ローマが滅んだと認識しているが、その後493年に族長テオドリック率いる東ゴート族がトラキア地方北部からイタリア半島に移動してオドアケルを倒し、東ゴート王国を建国する(コラム11)。

ところで、コンスタンティヌス朝最後の皇帝ユリアヌスが副帝に即位してライン川以西のガリア地方を統治した時期(355～360年)があった。腐敗と華奢を嫌うユリアヌスの統治は公正で、兵の支持と民衆の信頼を得ていたように思う。

358年、ユリアヌスは帝国防衛の要となるフランドル地方(フランス名フランダース。ベルギーのスヘルデ川以西から北フランス東部カレー市までの地域)に駐屯地をつくり、彼を慕うサルマタイ人の末裔、ラテン系やケルト系、ゲルマン系やペルシャ系の傭兵たちを配置する。これがサリ族のはじまりである(ちなみに、「サリ」の意味は「戦闘」)。

ユリアヌスの死後、ゲルマン人の大移動がはじまる。西ゴート族がイベリア半島を占領し、ヴァンダル族が北アフリカを占領した後、西ローマ軍はブリタニアを放棄してガリア地方からも撤退する(すなわち、現在のイギリスと西フランスから撤退した)。他方、フランドル地方に残されたサリ族を族長メロヴィクスが率いる。そしてライン川を越えてガリア地方に侵入したフランク族を糾合する。

451年、サリ・フランク族(以後、「フランク族」と呼ぶ)は名将アエティウス率いる西ローマ軍に合流し、カタラウヌムの戦いでアッティラ率いるフン族を撃退する。その後457年にメロヴィクスが死去し、彼の嫡子キルデリクスがフランク族を率いる。キルデリクスはアエティウスの嫡子シアグリウスを支え、西ゴート王国との戦いで奮戦した。そして482年に死去する。キルデリクスの死後、彼の嫡子クロヴィス(フランス名「ルイ」)がフランク族を率いる。

メロヴィクスとキルデリクスの代まで、アエティウスの嫡子シアグリウスがロレーヌ川中流以北のガリア地方を統治していた。フランク族はフランドル地方に定住していたが、メロヴィクスやキルデリクスとちがいくロヴィスは野心家である。486年、クロヴィス率いるフランク軍がセーヌ川を越えロレーヌ川中流以北に侵攻し、シアグリウス率いる西ローマ軍を撃破する(ルワソンの戦い)。

ロレーヌ川中流以北を征服したクロヴィスは、その後ブルグント王キルペリク2世の娘クロティルダと結婚する。当時、ブルグント族はロレーヌ川上流以東(概ねブルゴーニュ地方)でブルグント王国を建国し、西ゴート王国と対峙していた。クロティルダと結婚したクロヴィスはブルグント王キルペリク2世と対西ゴート同盟を締結する。

496年、ライン川上流を支配していたアラマンニ族がガリア地方に侵攻した。クロヴィス率いるフランク軍が撃退し、さらにアラマンニ族が支配していたファルツ地方やアルザス・ロレーヌ地方を獲得する。その後クロヴィスはアタナシウス派キリスト教に改宗する。改宗後、クロヴィスはサリ族の法＝サリカ法典を編纂し、最高法規＝アタナシウス派キリスト教と慣習法の下でフランク族を統制した(クロヴィスの妻クロティルダは熱心な正教徒＝アタナシウス派キリスト教徒であった。クロティルダとの結婚がクロヴィスの改宗につながったと言える)。

507年、フランク族とブルグント族の連合軍が西ゴート王国に侵攻する。西ゴート王アラリック2世が戦死し、西ゴート族はピレネー山脈以西に後退した。508年、アキテーヌ地方を獲得してライン川以西からピレネー山脈以東まで支配したクロヴィスは、拠点をフランドル地方からパリ盆地に移し、フランク王国を建国してフランク王クロヴィス1世＝ルイ1世に即位する。

東ローマ皇帝アナスタシウス1世はクロヴィスの建国を歓迎した。ゲルマン人のアリウス派信仰に苦慮していたアナスタシウス1世には、改宗したクロヴィスの建国が旧ローマ版図の復元につながる、と思えたかもしれない。だが、フランク王国は「東ローマ帝国」の版図外＝亜周辺に止まる(コラム12)。

(本書では、メロヴィング朝期のフランク王国とその後のブルグント王国や西ゴート王国、次節で述べるランゴバルド王国の歴史を論じない。それらを論じることは本書の執筆目的から大きく離れる)

コラム11: アウグスティヌスとボエティウス

西ゴート族がローマ市を略奪した後、無力なキリスト教会を非難したローマ市民に対して北アフリカの司教アウグスティヌス(354～430年)はキリスト教会を擁護し、他方、ローマ市民と異民族の共存を提唱した。彼は自身の著書「神の国」でそれを論じている。また東ゴート王国の執政官に就任したボエティウス(480～524年)もアウグスティヌスと同様な考えを抱いていた。

アウグスティヌスもボエティウスも古代ギリシャの哲学や自然学、ヘレニズム期に誕生したストア哲学や新プラトン主義に精通していた。彼らの著作は後世に多大な影響を与える(ボエティウスはアリストテレスの論理学＝オルガノンをラテン語に翻訳した。また、彼が死の直前に書いた「哲学の慰め」は擬人化した古代ギリシャ哲学との対談である)。

だが、大きな疑問がひとつある。それは、アウグスティヌスがどのようにして古代ギリシャの哲学や自然学、ストア哲学や新プラトン主義を学び、ボエティウスがどのようにしてアリストテレスの「オルガノン」をラテン語に翻訳したのか、という疑問である。

アウグスティヌスは北アフリカで生まれた。成人してローマ市に移住し、マニ教からキリスト教に改宗した後、北アフリカに戻る。彼がギリシャ(アテネやコンスタンティノーブル)を訪問する場面はない。他方、ボエティウスは、青年期にアカデメイアで学んだようだが、彼が「オルガノン」を翻訳した場所はローマ市である。しかし原本なしで「オルガノン」のような大著を翻訳することはおそらくできない。

コラム10で述べたが、アレクサンドリア教会総主教キュリロスが彼を支持するキリスト教徒たちを扇動し、新プラトン主義哲学者ヒュパティアを殺害した。このヒュパティア殺害をコンスタンティノーブル教会大主教ネストリウスが非難する。だが、キュリロスは反発した。

身の危険を察知したネストリウスは、431年のエフェソス公会議を欠席してコンスタンティノーブルから離れる。彼は修道院で隠遁生活を送り、死去する直前に「ダマスコ(ダマスカス)のヘラクレイデス論」を書く。その後ネストリウスを支持する神学者たちが古代ギリシャの哲学や自然学、ストア哲学や新プラトン主義の集大成作業をはじめた。具体的には、新約聖書や旧約聖書の編纂と同様な編纂を古代ギリシャの哲学や自然学、ストア哲学や新プラトン主義に施す作業をはじめた。

(最初に地動説を提唱したのは古代ギリシャの哲学者ヘラクレイデスである。彼はプラトンの弟子で、ダマスコのヘラクレイデスは彼と同一人物ではないかもしれないが、筆者は古代ギリシャの哲学や自然学を想定してネストリウスが「ダマスコのヘラクレイデス論」を書いたと考えたい)

アウグスティヌスが、迫害されていたネストリウス派神学者たちと交流していた可能性がある。ボエティウスの頃に、ネストリウス派神学者たちはサーサーン朝ペルシャのジュンディーシャープール学院に逃れるが、ボエティウスは彼らと交流し、「オルガノン」の原本を入手したように思う。

歴史家たちは、東ゴート王テオドリックがボエティウスを処刑したのは、テオドリックがアリウス派キリスト教徒でボエティウスがアタナシウス派キリスト教徒であったためである、と論じている。だが、テオドリックは東ローマ皇帝ゼノン(在位474～491年)に忠誠を近い、その後ローマに進軍してオドアケルを倒した。そして東ゴート王に即位した後も東ローマ皇帝の家臣であり続けた。そのようなテオドリックが、宗派のちがいを理由にしてボエティウスを処刑するはずがない(当時の東ローマ帝国にとって、イタリア半島よりトラキア地方のほうが重要である。筆者には、ゼノンがトラキア地方の代替地としてイタリア半島をテオドリックに与え、東ゴート王国の建国を認めたように思える)。

テオドリックが嫌ったのは、アタナシウス派キリスト教ではない。彼が嫌ったのは古代ギリシャの哲学と自然学、ストア哲学や新プラトン主義である。彼にとって、ボエティウスは「異教」徒であった。

コラム12: 「ダ・ヴィンチ・コード」

クロヴィス1世の死後、彼の孫の代にフランク王国が分裂する。フランク王が独自金貨を発行して求心力の回復を試みる場面もあったが、独自金貨は「メダル」にすぎなかった。

歴史家たちは、メロヴィング朝期のフランク王国を「封建国家」とすると論じる場合があるが、筆者は賛同できない。ユスティニアヌス1世下の東ローマ軍がイタリア半島に進軍して東ゴート王国と戦火を交えた際、「漁夫の利」を得ようとしたフランク族の一部も侵入した。だが、フランク王は彼らの行動を制止していない。封建制は分権体制であるが、統治制度でもある。フランク王国が封建国家であれば、部族の勝手な侵略や略奪を許すはずがない。

とはいえ、メロヴィング朝は約270年続いた。理由はセナトール貴族と呼ばれる在住の元ローマ市民とキリスト教会が存在したからである。フランク族がフランク王国を建国したが、フランク族が占める王国人口の割合は約5パーセントである。したがって、実質的な王国支配者層はセナトール貴族で、彼らの多くがキリスト教会の世俗司祭になり、荘園を経営した。フランク王とセナトール貴族の関係は封建的主従関係と呼ぶにはほど遠いものであった。

(荘園＝古典荘園が誕生して消滅するまでの時代が「広義の中世」とも言えるが、重視すべきことは、国教会が保有する荘園が多数存在したことである。キリスト教会だけでなく、仏教寺院も同様である。すなわち、ヨーロッパだけでなく、同時代の中国や韓国も同様である。しかし日本の場合、比叡山と高野山を除けば仏教寺院の荘園規模が小さい(逆に言えば、中国や韓国の仏教寺院はたいがい比叡山や高野山規模の寺院である、と言える)。そのため荘園の依託経営が進展し、請負業者がやがて武士階級を形成する。日本では、仏教が国教＝最高法規化しなかった。律令制も根付いていない。日本に特異性があるとすれば、奈良時代や平安時代に仏教を最高法規化できなかった場面を考察の起点にすべきであると筆者は考える)

ところで、「ダ・ヴィンチ・コード」という小説で、著者のダン・ブラウンはメロヴィング家を「イエスとマグダラのマリアの末裔」と記載しているが、可能性はまったくない。「ダ・ヴィンチ・コード」は映画化され、メロヴィング家が「奇跡」の血を継いだと思った人もいるようだが、フィクションである。しかしメロヴィング家が「ユリアヌスとガリア人女性の末裔」であった可能性がある。

メロヴィクス率いるフランク族は、アエティウス率いる西ローマ軍に合流してアッティラ率いるフン族と戦ったが、メロヴィクスはキリスト教に改宗していない。彼はユリアヌスの学友(アカデメイアの学友)であった可能性がある。そして、クロヴィスが本当にメロヴィクスの孫であったとの証拠がない(メロヴィクスの死後、キルデリクスは約8年放浪している。彼がフランク族の元に戻ったときの連れ子がクロヴィスである)。

もしもクロヴィスが「ユリアヌスの孫」であったとすれば、シアグリウス率いる西ローマ軍を撃破して自身がガリア地方に君臨すると考えたとしてもおかしくない。また、当時の東ローマ皇帝アナスタシウス1世がコンスタンティヌス朝の血を継ぐ「王」の建国を歓迎するのは当然である。

他方、伴侶にせがまれて行ったことであったとしても、改宗は裏切りである。筆者は、クロヴィスの改宗を責めるつもりはないが、「王」の力でアカデメイア・パリ分校を開校してほしかったと思う。クロヴィスがアカデメイア・パリ分校を開校すれば、その後の人類史が多少ちがうものになっていたかもしれない。おそらく、ユリアヌスはそのつもりでいた。副帝時代のユリアヌスの本拠地もパリである。

3. 2 ユスティニアヌス1世の失政とサーサーン朝ペルシャの滅亡

クロヴィスの建国を歓迎したアナスタシウス1世の死後、東ローマ皇帝に即位したユスティニアヌス1世(在位527～565年)は西ローマ版図の奪還を目指す。532年、ユスティニアヌス1世はサーサーン朝ペルシャと平和条約を結びユーフラテス川以西を防衛していた東ローマ軍を北アフリカに派兵した。名将ベリサリウス率いる東ローマ軍がヴァンダル族を破り、北アフリカとシチリア島やサルデーニャ島、イタリア半島南端を奪還する。おかげでヴァンダル族の海賊行為がなくなるが、北アフリカは復興しなかった。

ユスティニアヌス1世治世下の東ローマ帝国は、テオドシウス1世治世下の古代ローマ以上に強固な中世帝国になっていた。しかも軍政と民政を分離しているため、北アフリカを奪還したベリサリウスはその後の統治に関与できない。他方、新たに赴任した文官たちは「ローマの法」を適用する。とりわけ同じ税制を導入する。

だが、北アフリカはヴァンダル族が占領して約100年経過している。東ローマ帝国の文官たちは、おそらくヴァンダル族が課した税より重い税を北アフリカの民衆に課した。重税に苦しむ自由農民が農地を手離してもおかしくない。奪還後、北アフリカの農地が砂漠化する。

中世帝国では、皇帝が必要に応じて軍政と民政を束ね、状況に応じて民政を「中央」と「周辺」に分割する。したがってディオクレティアヌスもコンスタンティヌス1世も、テオドシウス1世も兵と共に転戦し、戦後の属州統治にしばらく関与した。だが、ユスティニアヌス1世がコンスタンティノープルから離れて属州に出向く場面はない。

にもかかわらず、ユスティニアヌス1世は「異教徒が集う場所」であるとの理由でプラトンが開校したアカデメイアとアリストテレスが開校したリュケイオンを潰す。他方、ユスティニアヌス法典＝ローマ法大全の編纂を命じ、アタナシウス派キリスト教の下で古代ローマの版図を復元しようとする。

(サーサーン朝ペルシャ同様、ローマもテオドシウス1世の代に国教＝アタナシウス派キリスト教の下で多様な慣習法を統合し、テオドシウス2世の代に法典＝テオドシウス法典を編纂して慣習法体系を構築した。ユスティニアヌス1世が編纂を命じたユスティニアヌス法典＝ローマ法大全は体系化した慣習法の集大成である。ユスティニアヌス法典は、ユスティニアヌス1世の死後完成するが、東ローマ帝国は約400年後にバシリカ法典＝国法を編纂してユスティニアヌス法を卑俗法化する。しかしユスティニアヌス法は「国法」の制定が遅れたヨーロッパ諸国で長く残る)

526年、東ゴート王テオドリックが死去する。テオドリックの死後、彼の娘アマラスンタが女王に即位するが、テオドリックの甥テオダハドが彼女を殺害して東ゴート王に即位する。他方、北アフリカを奪還した東ローマ皇帝ユスティニアヌス1世はイタリア半島の全域奪還を目論んでいた。そしてアマラスンタ殺害を侵攻の口実にする。

ユスティニアヌス1世は、名将ベリサリウスと東ローマ軍にイタリア半島への侵攻を命じる。経緯は割愛するが、約20年、ベリサリウス率いる東ローマ軍は東ゴート族と戦い続けた。東ローマ軍は征服した地域の治安に苦慮し、546年に三度目の「ローマ市略奪」が勃発する。

550年、ベリサリウスに代わり文官のナルセスが東ローマ軍の総司令に就任する。ナルセスは奮戦し、東ゴート王国は滅亡した。その後ナルセスは「漁夫の利」を得ようとして侵入したフランク族も撃退し、イタリア半島全域を奪還する。だが、彼は大きなまちがいをひとつした。

イタリア半島に侵攻する場面で、ナルセスはユトランド半島から南下してドナウ川以南に定住していたゲルマン人部族＝ランゴバルド族を雇い傭兵化した。ランゴバルド族は勇敢に戦ったが、略奪も行った。略奪を苦慮したナルセスは、イタリア半島からランゴバルド族を追放する。

当時、ランゴバルド族はドナウ川以北のパンノニア地方(概ね現在のハンガリーやセルビア地方やダキア地方の一部)を支配していたゲピト族と敵対していた。ナルセスに追放されドナウ川以南に帰還したランゴバルド族は、再度ゲピト族と敵対し、東方から侵入してきたアヴァール人と同盟を結ぶ。そしてゲピト族を殲滅する。その後アヴァール人がパンノニア地方を支配し、ランゴバルド族は再度イタリアに向かう。

(ゲピト族もゲルマン人の一部族で、カタラウヌムの戦い後、彼らがフン族を追い出しパンノニア地方を支配した。他方、アヴァール人はモンゴル高原で突厥に破れ西方に逃れた柔然である。すなわち、アヴァール人は遊牧民で、おそらくフン族を糾合し、騎兵集団がゲピト族を殲滅した。アヴァール人の騎兵集団に対抗できないランゴバルド族は再度イタリアに向かうしかなかったのかもしれない。しかし突厥の征西に備えていたアヴァール人＝柔然がイタリアに向かう場面はない。ゲピト族を殲滅したアヴァール人＝柔然は、パンノニア地方に定住し、遊牧生活を200年以上営む。ちなみに、東ローマ帝国に養蚕が伝わったのはこの頃である。アヴァール人＝柔然が何らかの役割をはたした可能性がある)

568年、族長アルボーノ率いるランゴバルド族がイタリア半島北部を占領し、ランゴバルド王国を建国する。アルボーノは572年に暗殺されたが、ランゴバルド族は590年にローマ市に侵入し、イタリア半島を全域支配して各地を部族の有力者に分配した(565年に死去したユスティニアヌス1世はこの惨事を知らない。しかしナルセスはこの惨事に直面した。彼はミラノで死去する)。

605年、東ローマ帝国はランゴバルド族に和平を提案し、旧西ローマ帝国の帝都ラヴェンナとローマ市、ラヴェンナとローマ市を結ぶ回廊(概ねイタリア半島中部)を除くイタリア半島北部と南部を放棄する。その

後約200年、ランゴバルド族がイタリア半島北部と南部を支配した(ちなみに、ランゴバルド族の支配を逃れたローマ市民の一部がラヴェンナ北東で「ヴェネツィア」を建国する)。

ユスティニアヌス1世と同時代のサーサーン朝ペルシャ王はホスロー1世(在位531～579年)である。ホスロー1世は名君であった。彼はチグリス川を灌漑し、古代シュメール期に栄えたユーフラテス川下流を再開発する。他方、版図内の都市と道路を整備した。

ホスロー1世の治世下で、サーサーン朝ペルシャの穀物生産量が増大し、交易量も増大する。だが、東方のエフタルとの関係が悪化した。

(ユスティニアヌス1世がアカデメイアとリュケイオンを廃した後、ホスロー1世はアテネの学者たちを受け入れる。受け皿はシャープール1世がカールーン川下流域に開校したジュンディーシャープール学院である。おかげで古代ギリシャの哲学や自然学が残るが、アテネの哲学者や自然学者たちが亡命する前にコンスタンティノープルのネストリウス派キリスト教神学者たちが亡命している。プラトンが、彼の膨大な著作を彼個人で書いたとは考えにくい。同様に、アリストテレスが彼の膨大な著作を彼個人で書いたとは考えにくい。亡命したネストリウス派キリスト教神学者とアテネの学者たちが、古代ギリシャの哲学や自然学、プラトン主義や新プラトン主義、ストア哲学に新約聖書や旧約聖書の編纂に準じる集大成作業を施した。彼らにとって、哲学や自然学(数学も含む自然学)が普遍的真理であるとするれば、成立年代や真の作者、発案者が誰であるかはどうでもよい。彼らにとって、プラトンやアリストテレス、ピタゴラスやユークリッド、アルキメデス等は「記号」である。筆者には、プラトンやアリストテレスの著作は中世思想をかなり含んでいるように思える。おそらく、彼らが中世風に改竄した(「中世風に集大成した」と言うべきかもしれない)。サーサーン朝ペルシャ滅亡後も彼らの後継者たちがジュンディーシャープール学院に残る。そしてアッバース朝イスラーム帝国期にバグダードの「知恵の館」やタブリーズ付近に移動して「集大成」を保存する。中国＝唐から伝わった製紙技術が役立った)

古代社会は「富(消える自然循環物)」が経済資源である。中世社会は「富財(消える自然循環物と消えない非自然循環物)」が経済資源である(ちなみに、近代社会は「富財と商品、資本」が経済資源である)。そして、中世帝国は自国財貨の勢力圏を拡大しようとする。他方、亜周辺が帝国の財貨を略奪しようとする。互いに中世帝国化した東ローマ帝国とサーサーン朝ペルシャはアルメニアの黒海沿岸やシリアの地中海沿岸を奪い合ったが、同時に亜周辺の略奪に苦しんだ。

ホスロー1世は、アルメニアとシリアやパレスチナの征服をいったん諦め、ユスティニアヌス1世と休戦協定を結ぶ。そしてエフタルのさらに東方の突厥と同盟し、エフタルを挟撃する。エフタルは滅亡するが、その後サーサーン朝ペルシャと突厥の関係が悪化する。そして突厥＝西突厥と東ローマ帝国が同盟を結ぶ。その後約20年、西突厥と東ローマ帝国はサーサーン朝ペルシャを挟撃する(コラム13)。

だが602年、東ローマ軍の百人隊長(下士官)フォカスが反乱を起こし、当時の東ローマ皇帝マウリキウスを殺害して皇帝に即位する。同時代のサーサーン朝ペルシャ王はホスロー2世である。ホスロー2世はフォカスを「帝位篡奪者」と呼び、東ローマ帝国に侵攻した。

610年、カルタゴ総督ヘラクレイオスがフォカスを捕縛して処刑し、東ローマ皇帝に即位する。即位後、ヘラクレイオス1世はサーサーン朝ペルシャとの和睦を望んだが、ホスロー2世は応じない。ホスロー2世は、「ローマの帝位をユスティニアヌス1世の子孫に戻す」と宣言し、侵攻を続けた(ヘラクレイオス1世はカルタゴで育ったアルメニア人で、ユスティニアヌス1世の子孫ではない。ヘラクレイオス1世即位後、東ローマ帝国の皇統がヘラクレイオス朝に変遷する)。

ホスロー2世率いるペルシャ軍は613年にシリアのダマスカス、614年にパレスチナのエルサレムを陥落する。そして621年にエジプトを占領した。その後アナトリア高原に転進してボスポラス海峡を渡り、コンスタンティノープルを包囲する。

だが、東ローマ軍が反撃する。ヘラクレイオス1世率いる東ローマ軍は、ホスロー2世率いるペルシャ軍をサーサーン朝ペルシャの首都クテシフォンに追い詰めた。ホスロー2世の息子カワードが父を殺害し、ヘラクレイオス1世と和睦する。

(ホスロー2世の妃は、フォカスが殺害した東ローマ皇帝マウリキウスの娘マルヤムである。彼女と結婚したホスロー2世は、自身が東ローマ皇帝に即位するつもりでいたのかもしれない。ホスロー2世を殺害したカワードは、ホスロー2世とマルヤムの間に生まれた息子であるが、彼に東ローマ皇帝に即位する野心はなかった。彼は、首都クテシフォンを戦火から守ろうとして、父を殺害したのかもしれない。ちなみに、名作「シーリーン」はホスロー2世とアルメニア・キリスト教徒の娘シーリーンの恋愛物語で、なぜかマルヤムもカワードも「悪役」として登場するが、後世の作品である)

約20年続いた戦争で東ローマ帝国とサーサーン朝ペルシャが疲弊し、アラブ人が「漁夫の利」を得る。634年、アブー・バクル(初代ムスリム正統カリフ)が東ローマ帝国に宣戦布告する。そして636年、ヤルムークの戦いでヘラクレイオス1世率いる東ローマ軍を撃破した。さらに639年、エジプトに進軍し、アレクサンドリアを奪取する。

当時のアラブ人はイスラーム教徒＝ムスリムである(あるいはイスラーム教徒が「アラブ人」である)。ムスリム軍がシリアとパレスチナ、エジプトを占領し、東ローマ帝国の版図が大きく縮小した。その後ムスリム軍はキプロス島とロードス島、北アフリカの東ローマ領も征服する。他方、642年のニハーヴァンドの戦いでペルシャ軍を破り、メソポタミアも征服する。そして651年、最後の諸王の王ヤズデギルド3世が部下に殺害され、サーサーン朝が断絶した。

サーサーン朝ペルシャを滅ぼしたムスリム軍は「大征服」をいったん休止し、占領した各地の統治をはじめ。占領した各地では、アラブ人は少数派である。アラブ人の信仰＝イスラーム教に統治規則＝法が存在するとしても、強制できない。

ムスリム軍は、シリアとパレスチナ、エジプトでキリスト教とユダヤ教を容認し、ペルシャでゾロアスター教やマニ教を容認した。そして、東ローマ帝国とサーサーン朝ペルシャの官僚機構をそのまま活用する(ちなみに、ペルシャでは民衆の大半がイスラーム教に改宗するまで200年以上の歳月を要した)。

しかし東ローマ帝国とサーサーン朝ペルシャの官僚機構、キリスト教下で統合した慣習法とゾロアスター教下で統合した慣習法は異なる。内乱が勃発し、661年にムーアウィヤがウマイヤ朝アラブ帝国(首都はシリアのダマスカス)を建国する。

ウマイヤ朝アラブ帝国建国後、ムーアウィヤは「大征服」を再開する。アラブ帝国の版図がメソポタミア全域と北アフリカ全域、イベリア半島の大部分、そして現在のイランと南コーカサス地方、アフガニスタンやパキスタン、中央アジア(トランスオクシアナ地方)に広がる。

とはいえ、ウマイヤ朝アラブ帝国が金貨や銀貨を鑄造して発行するのはアブドゥルマリク(在位685～705年)がムスリムの長＝カリフの座についてからである。アブドゥルマリクは金貨＝ディナール金貨と銀貨＝ディルハム銀貨を鑄造して発行した。だが、それら金貨や銀貨は既存のローマ金貨やペルシャ銀貨を数量補填したにすぎない。

ウマイヤ朝アラブ帝国は、たんにアラブ人がギリシャ人やペルシャ人、アフリカ人の上位に君臨する征服王朝帝国であった。すなわち、「古代帝国」である。しかし経済資源が「富」から「富財」に変遷している。そのような時代＝中世に、そのような帝国＝古代帝国を維持するのは困難である。

それでもウマイヤ朝が約90年続いたのは、過去の東ローマ帝国とサーサーン朝ペルシャが多量の金貨や銀貨を発行し、財貨の社会的蓄積がある程度存在したからである。だが、おそらく版図の拡大とインドや中国との交易により、財貨の不足が生じた。

(アブドゥルマリクは、武官や文官の給与をすべて財貨で支払った。官僚の給与をすべて財貨＝貨幣で支払った最初の支配者はアブドゥルマリクであると言われているが、それも財貨不足が生じた原因のひとつである)

750年、ペルシャ人改宗者たちの支持を得たアブー・アッバースが首都ダマスカスに進軍し、ウマイヤ朝を打倒する。そして、すべてのイスラーム信徒にアラブ人と同等の地位を与えた。すなわち、税制上の差別を廃止する。

アブー・アッバースの死後、カリフの座を継いだマンスールは旧都クテシフォン近くに新都バグダードを建設して官僚機構と統治機構をサーサーン朝ペルシャ型に統合し、アラブ帝国を改造する。すなわち、アラブ帝国を中世帝国化し、イスラーム帝国＝アッバース朝イスラーム帝国につくり変える。そしてカリフが事実上の「諸王の王(シャーハーンシャー)」になる。カロリング朝フランク王カール1世は、アッバース朝歴代カリフを「ペルシャ王」と呼んだ。

(アッバース朝イスラーム帝国を「第四ペルシャ帝国」と呼ぶこともできる。とはいえサーサーン朝ペルシャとは異質な中世帝国である。アッバース朝イスラーム帝国は、次章で論じる金銀複本位制を発明した。金銀複本位制の発明は、時代が「広義の中世」の出現期から「広義の中世」の突破期に変遷したことを意味する)

コラム13: エフタルと西突厥のちがひ

筆者の歴史認識は、ローマがゲルマン人の略奪に苦しんだのと同様に、サーサーン朝ペルシャはエフタルや西突厥の略奪に苦しんだ、というものである。だが、そのように考えない歴史家もいる。彼らは、エフタルや西突厥がサーサーン朝ペルシャに侵入して略奪を行ったのは、サーサーン朝ペルシャがエフタルとローマ、西突厥とローマの交易を妨害したためである、と論じている。彼らは、ローマは「善の帝国」で、サーサーン朝ペルシャは「悪の帝国」である、と思い込んでいるのかもしれない。

しかし彼らは、サーサーン朝ペルシャがどのようにしてエフタルとローマ、西突厥とローマの交易を妨害したかまでは論じない。もしも彼らが言うように、サーサーン朝ペルシャが交易を妨害したとすれば、原因は貨幣経済である。ただし、エフタルと西突厥では事情が異なる。彼らの考えは、エフタルには当てはまるかもしれないが、西突厥には当てはまらない。

ペルシャ商人は「諸王の王」が発行する銀貨で商いを行った。しかし素朴な遊牧民エフタルの人々が交易で得たいものは穀物である。彼らは穀物以外の物産を必要としない。

エフタルは、おそらく物々交換（および金と穀物の交換）を望んだ。それでもペルシャ商人が銀貨を支払い、エフタルの物産（毛皮や羊毛等）を購入していたとすれば、エフタルは穀物を購入する場面でペルシャ商人から得た銀貨を使用するしかない。そして、ペルシャ産穀物よりローマ産穀物のほうが安ければ、直接ローマから穀物を輸入しようとする。

だが、ペルシャ領内を通過しなければローマ産穀物（あるいはエジプト産穀物）を輸送できない。そして、サーサーン朝ペルシャが多額の通行税を取っていたとすれば、それが戦争の原因になる。

（他方、コラム7で述べたが、サーサーン朝ペルシャがエフタルが支配するバクトリア地方とガンダーラ地方の金山の領有を望んでいた可能性がある。サーサーン朝ペルシャは、エフタルに対して攻撃的であった。突厥に対しても攻撃的であったが、西突厥に対しては受け身になる）

エフタルが、サーサーン朝ペルシャから穀物を強奪する場面があったかもしれない。だが、西突厥はペルシャ銀貨を強奪した。そして強奪したペルシャ銀貨をローマ金貨と交換し、中国に運んだ。

当時の中国の財貨は銅貨である。したがって当初、西突厥は銅貨による商いを望んだかもしれない。だがペルシャ商人は銅貨を受け取らない。他方、隋唐帝国時代の中国では、金や金貨を朝貢すれば米や小麦を得ることができる。そして輸送する富財が「大型物産」でなければ、道路事情を無視できる。

西突厥は、サーサーン朝ペルシャを迂回して略奪したペルシャ銀貨とローマ金貨を交換した。交換場所は、おそらくクリミア半島沿岸である（バクトリア地方やガンダーラ地方の金山で採掘した金とローマ金貨を交換する場面もあったかもしれない）。

アヴァール人がパンノニア地方を占領し、東ローマ帝国と同盟したため、敵対する場面もあったが、西突厥と東ローマ帝国の関係は概ね良好であった。むしろ金や金貨を欲する隋唐帝国の意向もあったと思う。東ローマ帝国と隋唐帝国の関係も良好であった。

（フン族は北匈奴、西突厥はトルコ系部族、アヴァール人はモンゴル高原で突厥に破れ西方に逃れた柔然で、モンゴル系部族であるとの説がある。フン族が北匈奴であったか否かは不明であるが、西突厥がトルコ系部族であることはあきらかで、アヴァール人＝柔然説の信憑性も高い。アヴァール人が柔然であったため、西突厥と東ローマ帝国が一時敵対したと論じる歴史家もいる。しかし隋唐帝国が命じない限り、西突厥は征西できない。そして、当時のアヴァール人＝柔然は隋唐帝国の視野にない）

前章で、中世帝国の国教と国教会、貨幣経済の関係を論じたが、物品貨幣＝物々交換が望ましいと考える民衆にとって貨幣経済は「非関税貿易障壁」である。とりわけ中世帝国の版図外で暮らす民衆には迷惑な仕組みであった（他方、財貨は略奪が容易な「財」である。中世帝国の統治機構や統治制度と無縁な亜周辺の民衆にとって、財貨は便利な道具＝交換財であった）。

何度も述べたが、筆者は財貨が中世帝国の統治制度であったと認識している。財貨が土地や奴隷を財産化した。そのため荘園が増え、奴隷も増大する。他方、異なるふたつの財貨の交換が順序構造＝貨幣経済と貨幣クラス（財貨と物品貨幣の集合）を形成し、財貨の退蔵を抑止して物価と統治の安定に寄与する。

おかげで中世帝国の時代が長く続くが、財貨や財産が先史時代から続く狩猟採集社会を否定し、貨幣経済と貨幣クラスが古代から続く氏族社会を否定した点を見落とせない。言い換えれば、供託と分配の仕組みや贈与と返礼の仕組みが縮小したのは「近代」ではない。「中世」である。とはいえ、「広義の中世」の突破期後半に封建制が新たな贈与と返礼の仕組み構築する。

3. 3 魏普南北朝時代と隋唐帝国時代の中国

人類が遊動生活をしていた頃の大地は無限＝可能無限であった。人類が定住して農耕をはじめた後も、おそらく紀元前2000年頃まで、大地は無限であった。しかし新バビロニア＝カルデアがメソポタミアを支配した頃から有限な「土地」になる。他方、銀貨が誕生した。とはいえ、第二ペルシャ帝国＝アルサケス朝ペルシャの頃まで、銀貨は物品貨幣(家畜や穀物)と等価な「貨幣」ではない。銀貨の用途は限定的で、土地売買や奴隷売買も限定的であった。

4世紀後半以降、財貨(金貨や銀貨)と物品貨幣(家畜や穀物)が貨幣クラスを形成し、貨幣経済の下で土地売買や奴隷売買に関与する人々(貴族や聖職者)が増大する。そして荘園が誕生した。当初、荘園は皇族や貴族、聖職者等の保養地あるいは別荘地であったが、やがて彼らの農地になる。そして農耕に従事する人々(小作農民や奴隷)も増大する。すなわち、土地と奴隷が「財産」になる。

むろん古代帝国にも奴隷は存在した。しかし財産ではない。古代エジプトや古代メソポタミア、古代ギリシャや古代ペルシャ、古代インド等の奴隷がどのような境遇に置かれていたかはわからないが、3世紀の「グレート・リセット」以前のローマでは、奴隷も市民権を得る場面があった。古代中華帝国の奴隷(秦漢時代の賤民。隋唐時代の律令制下で「奴婢」になる)も同様である。

4世紀後半以降、荘園が誕生して奴隷人口が増大するが、問題は土地の売り手や買い手がどのようにして多数の奴隷を獲得したかである。中世帝国化したローマやペルシャでは、奴隷のルーツは概ね戦争の敗残兵や難民、棄民である。しかし、同時代の中国は「人間狩り」を行った。

304年、永嘉の乱が勃発し、三国時代後の中国を統一した西晋が滅ぶ。だが皇族のひとり(司馬睿)が江南に逃れ、建康(現在の南京市)で東晋を開国する。347年、皇族の桓温が益州(現在の四川省)を征服し、東晋の版図を三国時代の呉と蜀を合わせた領域に広げた。383年、華北を統一した前秦の皇帝苻堅が大軍を率いて南下したが、謝玄率いる東晋軍が撃破する。

だが、その後内乱が勃発し、420年に劉裕が東晋を滅ぼし宋を開国する。劉裕の死後、文帝(劉裕の三男。在位424～453年)が即位した。文帝の代の宋は「元嘉の治」と呼ばれ、江南の地は繁栄した。そして貨幣経済がはじまる。

文帝は多量の銅貨を鑄造して発行したが、それでも銅貨の数量に不足が生じた。歴史家や社会学者たちは、貴族階級が華奢を好み、商いが活発化したためである、と論じている。しかし荘園数が増大している。隋唐時代ほどの規模ではなかったにせよ、ひとりの貴族がひとつ以上の荘園を保有している。

西晋滅亡後、華北から移住した人々＝漢人が先住民を討伐した。漢人たちは討伐した先住民に奴隷労働を強制し、造園や農耕を営んだ。銅貨の数量不足の原因は土地売買と奴隷売買である。

宋は479年に滅ぶ。その後江南の地で齊、梁、陳という王朝が続く。齊(479～502年)は短命王朝であった。梁は概ね初代皇帝武帝が約50年在位した王朝である。晩年の武帝は仏教に心酔し、捨身と還俗を繰り返したことで有名であるが、治世前半の国政は安定していた。注視すべきことは、鉄銭を鑄造して発行したことである。歴史家たちは、銅の不足が生じたため、銅貨の代替物として鉄銭を鑄造して発行したと論じている。だが、鉄の融点は銅より高い。しかも人類が冶金で石炭を使い始めるのは唐代末期である。当時の鉄は、銅より貴重な金属であった。仏教に心酔した武帝が、鉄製武具をなくそうとして鉄銭を鑄造したのかもしれない。その梁は557年に滅び、陳(557～589年)が江南の地を支配する。だが、隋が南北を統一するまで続いた短命王朝であった(コラム14)。

他方、439年に北魏が華北と華中を統一する。北魏は孝文帝(在位467～499年)の代に均田制と三長制を実施し、洛陽に遷都した。洛陽遷都後、北魏にも貨幣経済が浸透する。貨幣経済の下で洛陽は繁栄したが、河北(黄河中流域以北)は繁栄と無縁であった。そして、北方の柔然と対峙していた有力層に不満が鬱積する。

523年、六鎮の乱が勃発した。外戚の爾朱栄が六鎮の乱を平定するが、その後北魏は東魏と西魏に分裂する。東魏も西魏も皇帝は傀儡であった。やがて東魏が高氏の北齊になり、西魏が宇文氏の北周になる。そして577年、北周の武帝が北齊を滅ぼし、華北と華中を統一する。

北周はサーサーン朝ペルシャに類似する中世帝国であった。北周は北魏の府兵制を継承したが、三長制を周礼(「しゅうらい」と読む)に改める。周礼は儒教が賞賛する古代周の官僚制度であり「法」である。むろん古代周が周礼をそのまま実施したか否かは不明である。しかし北周はそのまま実施した。

重要なことは、周礼は官僚制度であり法＝最高法規でもあった、ということである。ちなみに、北魏や北周の財貨は絹である。当時の絹は消える自然循環物＝富ではない。消えない非自然循環物＝財である。

(当時、江南で絹の生産は行われていない。行われていたとしてもわずかであったと思う。江南で絹の生産が本格化するの南宋期である。当時の中国の人々は麻服を着用していた。したがって絹が「財貨」になる。南朝の銅貨と北朝の絹の交換関係下でユーラシア大陸東部の経済空間にも貨幣経済が生じた。交換の場面で、仏教や儒教がどのような役割を担ったかは不明であるが、隋唐時代に寺院が金融を担う)

歴史家たちは、北魏の三長制は徴税のために必要な制度であったと論じている。歴史家たちの認識は正しいが、官僚制度と統治制度は支配対象がちがう。秦漢帝国時代の中国にも官僚制度は存在したが、統治制度と呼べるような「制度」は存在しない。呉楚七国の乱(紀元前154年)後の前漢で武帝が発行した銀貨は褒賞で、武帝が銀貨を与えたのは文官や武官たちだけである。人頭税を導入する前のローマや第二ペルシャ帝国＝アルサケス朝ペルシャも同様である。

国教が中世帝国の最高法規になり、慣習法を統合する。そして財貨が中世帝国の統治制度になる。国教＝最高法規と財貨＝統治制度は表裏一体であるが、北魏は征服王朝であった。したがって北魏は三長制を実施し、統治制度を整えたが、国教の一元は容易でない。しかし周礼を実施した北周は国教一元を強行する。

北魏の孝文帝は勤勉で、儒教を信奉していたが、自身が鮮卑系であることを認め仏教を国教化した。しかし、北周の武帝も鮮卑系であったが、「朕は胡人(非漢人)ではない。朕に仏教を敬う気持ちなどない。仏教は胡人の教えであり、正しい教えではない」と断言し、廃仏を断行する。むろん権益集団化した寺院を縮小して還俗を奨励し、兵員や農民を確保する必要もあったと思う。だが、それ以上に、周礼の下で国教を儒教に一元する必要がおそらくあった(すなわち、最高法規を制定する必要があった)。

華北と華中を統一した北周の武帝は江南に侵攻して南朝の併合を目指す。だが578年に死去する。そして581年、北周の幼帝＝静帝を輔弼していた楊堅が帝位を篡奪して隋を開国する。楊堅は北方の突厥を懐柔し、西方の吐谷渾を破る。その後江南に侵攻して陳を滅ぼし、華北と華中、華南を統一した。

楊堅＝隋の文帝は北魏以来の均田制と府兵制を継承したが、周礼を律令に改め仏教を国教化する。すなわち、北周とは逆に、国教を仏教に一元した(南朝を併合するのであれば、国教は仏教に一元するほうが現実的である)。

隋の文帝の治世は同時代の東ローマ皇帝ユスティニアヌス1世の治世に似ている。文帝の国教一元を重視する歴史家は少ないが、国教は最高法規である。国教は中世帝国の必要条件であり、国教会が十分条件である。国教の存在が同時代の東ローマ帝国と隋の類似性を作り出している。

ちなみに、中国で最初に国教＝最高法規を制定したのは北魏である。北魏は仏教を国教化した(南朝が仏教を国教化したのは梁の時代で、北朝より少し遅い)。だが、道教や儒教も「国教」であった。すなわち、北魏は国教を一元していない。したがって三長制のような緩い統治制度を実施するしかなかった。

だが、北周の武帝は廃仏を断行して国教を儒教に一元する。他方、隋の文帝は仏教に一元する。しかし異教が国教を否定し、異端が国教を歪める。ユスティニアヌス1世がアカデメイアやリュケイオンを廃校に追い込み、アリウス派キリスト教を弾圧したように、隋の文帝は国子学(アカデメイアに相当する中国の学府。西晋の武帝＝司馬炎が開校した。唐代に復校して校名が「国子監」になる)を廃校に追い込み、三階教や浄土信仰を弾圧した。

ユスティニアヌス1世と隋の文帝には他にも共通点がある。どちらも版図の拡大を強行した。そして彼らの侵略が最高法規を輸出する。すなわち、中世帝国の国教が垂周辺に伝わり、付随して財貨＝統治制度が垂周辺に波及する。たとえば、日本に仏教が伝来したのは552年であるが、大和朝廷が仏教の国教化を目指したのは隋朝以降＝飛鳥時代(592～710年)である。

(大和朝廷の崇仏政策は輸入した最高法規の強制である。したがって内戦の原因になった。飛鳥時代最初の内戦は蘇我氏と物部氏の戦いである。その後大化の改新と壬申の乱が勃発した。壬申の乱後、大和朝廷は銅貨＝富本銭を鑄造して発行する。日本書紀に、「今より銅銭を用いよ、銀銭を用いるなかれ」との記述があるが、天武天皇は統治機構＝寺院体制の構築と統治制度＝銅貨の普及を目指した。しかし成功したとは言いがたい。日本は、表層的に仏教と銅貨＝財貨を受け入れたにすぎない。律令制も不徹底で、口分田も広がらなかった。その後日本でも荘園が誕生するが、いくつかの例外を除けば、寺院が保有する荘園は規模が小さく数も少ない。当時の日本は、民衆の遊動性が高く、小規模な共同体が散在していた。一部の歴史家が、それが統治機構と統治制度を確立できなかった原因である、と論じている。しかし筆者は、仏教を最高法規化して慣習法を統合できなかったことが原因である、と考える。表層的に仏教と銅貨を受け入れた日本は「大地」を残し、10世紀初頭になるが、奴隸制＝奴婢制を廃止する(筆者の認識では、奴婢制廃止と遣唐使の廃止に同時代性があるが、それを指摘する日本史の専門家はいない)。ちなみに、銀銭は「無文銀銭」と呼ばれた当時の銀貨である。無文銀銭にも刻印があるが、漢字の刻印ではない。無文銀銭は、おそらく大型の縫合船＝ダウ船に乗船して渡来したペルシャ人が持ち込んだ銀貨の模造である。ジャンク船が登場するのは南宋期で、当時の中国は荒波を踏破する船舶を建造していない。余談であるが、天智天皇が仏教に帰依したとは思えない)

南北統一後、隋の文帝は高句麗遠征を強行する。しかし隋軍は大敗し、遠征は失敗する。後を継いだ煬帝も高句麗遠征を強行するが、失敗する。

高句麗遠征前、煬帝は大都市長安や洛陽、大運河の建設を強行していた。しかも隋は外来信仰＝仏教を国教化している。統治は不安定で、高句麗遠征失敗後、華北各地で反乱が勃発する。しかし煬帝は政務を放棄し、江南の地で遊興に浸った。618年、煬帝は臣下に殺害されるが、版図内に多数の群雄が残る。

唐を開国した李淵は北周の名門出身で、家格は隋を開国した楊堅と同格である。しかし煬帝が死去した直後の中国では割拠する群雄のひとりにすぎない。だが、他の群雄が洛陽を中心とする中原の地で覇を争う中で、長安を中心とする関中の地を支配する。そして、彼の次男李世民が他の群雄を各個撃破する。

626年、李世民は兄の李建成と弟の李元吉を殺害し、高祖＝李淵の譲位を得て即位した。唐の太宗＝李世民(在位626～649年)の治世は「貞観の治」と呼ばれ、太平の時代が続いたと伝えられている。しかし版図外で戦役が多発している。

太宗が即位した直後、突厥＝東突厥の大軍が長安付近まで進軍する。だが引き返す。おそらく、太宗が莫大な富財を東突厥に与え、和議を成立させた。翌年とその翌年、寒波がモンゴル高原を襲う。モンゴル高原で放牧していた家畜の大半が凍死し、東突厥で多数の凍死者や餓死者が出る。そして支配下の鉄勒＝モンゴル系部族が離反する。

629年、唐と鉄勒が東突厥を挟撃した。敗北した東突厥は唐に服従する。その後唐は高昌国を滅ぼし、タリム盆地全域(概ね現在の新疆ウイグル自治区)を支配する。そして644年、太宗も高句麗遠征を強行する。しかし唐軍は大敗する。

隋の文帝と煬帝、唐の太宗も高句麗遠征を強行して多大な損害を出す。秦漢時代の高句麗は中華帝国の版図であった。歴史家たちは、それが隋の文帝と煬帝、唐の太宗が高句麗遠征を強行した理由であると論じている。だが筆者は、高句麗遠征の目的は銅の獲得であったと考える。前章で、「アレクサンドロス3世の東征目的は銀の獲得だったのかもしれない」と述べたが、それと似ている。

古代中国文明は、黄河文明と長江文明、遼河文明に大別できる。三つの古代文明は高度な青銅器文化を生み出すが、黄河文明について言えば、青銅器を製造する場面で使用する銅、あるいは青銅器そのものを長江文明から入手して加工していた可能性がある。黄河の中流域、および下流域に良質な銅山がなかった。隋唐時代になっても状況は同じである。

しかし隋が華北と華中、華南を統一した後、貨幣経済が全面展開する。隋も唐も多量の銅貨を鑄造して発行する必要に迫られた。長江流域で採掘する銅だけでは多量の銅貨を鑄造できない場合、遼河流域で採掘する銅を取りに行くしかない。だが、当時の遼河流域を支配していたのは高句麗である。そして、高句麗に遼河流域を割譲する考えはない。

むしろ隋の文帝と煬帝、唐の太宗の高句麗遠征目的が銅の獲得であったというのは筆者の憶測である。とはいえ、そのように考えなければ、多大な損害を出しながら遠征を続けた理由、そして太宗の死後、則天武后が唐を約半世紀支配した構造が見えない(歴史家たちは、則天武后の政治手法や人材登用を重視するが、それらだけで大唐帝国を約半世紀支配できるはずがない)。

太宗の死後、高宗が即位する。しかし政務は則天武后が担う。そして668年、唐と新羅が高句麗を挟撃して滅ぼす。その後唐と新羅は戦火を交えるが、新羅の領土は韓半島内に止まる。遼河以東から鴨緑江までの広い地域が唐の版図になり、唐の「銅不足」が解消した。

則天武后が唐を支配した約半世紀間、民衆の反乱がまったく起きていない。朝廷が多量の銅貨を鑄造して発行し、貨幣経済が進展したためである。則天武后の死後、中宗が復位するが、しばらくして玄宗(在位712～756年)が即位する。玄宗の治世前半は「開元の治」と呼ばれ、唐の絶頂期であった。とはいえ拡大しすぎた版図の防衛に苦慮する。

中国では、魏晉南北朝期に宋が軍政と民政を分割した。また北魏が軍鎮制を実施している。軍鎮制は戸籍を兵籍と民籍に分割する制度である。軍鎮制下では、兵籍下にある成年男子だけが兵役につく。しかし隋と唐は府兵制を実施して兵籍と民籍をひとつにまとめ、戸籍をすべて兵籍化する(歴史家たちは、戸籍をすべて民籍化したと論じる場合があるが、筆者の認識では、すべて兵籍化した)。

とはいえ、中世帝国＝唐の府兵制と近代国家の徴兵制は民衆の負担がまるで違う。近代国家では、徴兵制下であれ募兵制下であれ、政府が兵士に武具や兵器を与える。だが唐では、兵士は自前で武具を用意しなければならない。しかし鉄は貴重品であった(中国で鉄製農具が普及したのは南宋期で、ヨーロッパより少し遅い)。

したがって戸籍をすべて兵籍化しても、自前で鉄製武具を用意できない成年男子は兵役につけない。結局、唐は府兵制と募兵制を併用する。唐は版図内の辺境に「藩鎮」を置き、傭兵を配置した。そして皇帝が任命する節度使が傭兵を束ねる。

以下(表2)は代表的な藩鎮をまとめた表である。兵員数がもっとも多い藩鎮は幽州であるが、幽州は現在の河北省および遼寧省である。すなわち、遼河流域である。

表2			
所在地	節度使名	兵員数	設置年度
亀茲(天山南路。南シルクロード)	安西節度使	24000	710年
庭州(天山北路。北シルクロード)	北庭節度使	20000	712年
涼州(現在の甘肅省。蘭州市周辺)	河西節度使	73000	710年
靈州(現在の甘肅省。敦煌市周辺)	朔方節度使	64700	721年
太原(現在の山西省)	河東節度使	55000	711年
幽州(現在の河北省と遼寧省)	范陽節度使	91400	713年
營州(現在の吉林省)	平盧節度使	37500	719年
鄯州(現在のチベット自治区)	隴右節度使	75000	713年
成都(現在の四川省)	劍南節度使	30900	714年
広州(現在の広東省)	嶺南五府経略使	15400	711年

唐は道先仏後策を実施し、不十分ながら慣習法を統合した。そして国教一元を断念する。そのため官僚機構が肥大した。唐は「大きな政府」の中世帝国になる。唐の歴代皇帝は、肥大した官僚機構に対応する人材を確保するために科挙を重視したように思う。

(科挙をはじめたのは隋であるが、隋は「小さな政府」の中世帝国である。隋の科挙は国教を仏教に一元した場面で減少した文官を補充するための一時手段にすぎない。ちなみに、科挙が文官採用試験として定着するのは北宋期である)

他方、貨幣経済の下で荘園が巨大化し、律令制が形骸化する。玄宗の治世下で、「大きな政府」の唐は財政難に陥り、傭兵に報酬を払えなくなる。751年のタラス河畔の戦いで唐軍がアッバース朝イスラーム軍に敗れ、同年、南詔国軍にも敗れたが、敗因はおそらく兵員と武具の不足である。

傭兵の報酬は銅貨と絹であったが、報酬が支払われなければ傭兵は反乱を起こす。755年、安史の乱が勃発した。首謀者の安祿山は平盧節度使と河東節度使、范陽節度使を兼任していた。

(ちなみに、唐は塩を専売化している。歴史家たちは、生活必需品の塩を専売化して財政を確保したと論じているが、それだけではない。前章で述べたが、異なる財貨の交換が貨幣経済を形成し、貨幣クラスが財貨の退蔵を抑止して物価と統治の安定に寄与する。金貨や銀貨を発行しなかった唐では、銅貨と絹、そして塩が「財貨」であった)

コラム14: 文選

清少納言は、枕草子に「文(ふみ)は文集。文選、新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文」と記している。どのようにして学んだかはわからないが、文集や文選、史記や五帝本紀を読破していたとすれば、清少納言は漢文に精通していたと言うしかない。

清少納言は才女であった。紫式部は、「だから男にモテないのだ」と言ったようだが、男性の視点で清少納言を見下しているように思う(ひょっとして、紫式部は「男」だったのかもしれない)。

とはいえ、たんに「文は文選」と書くほうが清少納言らしい。むしろ平安時代の女官たちは白居易の詩集(文集)を暗誦するくらいの教養を必要としたのかもしれない。しかし中世東洋文学の中心は文選であり、他は文選の周囲を回る惑星のような存在である。清少納言は、「文は文選」、と書くだけでよかった。

その文選は南朝の梁で編纂された。中心人物は武帝の長子(昭明太子)である。筆者は漢文に疎いが、南朝宋代に隠遁生活を過ごした陶淵明の漢詩に仏教的なものを感じない。全体として、文選にも仏教的なものをあまり感じない。

だからこそ、文選は科挙受験者の必読書になったのかもしれないが、しかし「皇帝菩薩」と呼ばれた武帝が統治する梁で編纂された書物であるにもかかわらず仏教色が薄いとすれば、中世帝国は政治や軍事と文学に大きな隔たりがあった、と言うしかない。

題材は豊富にあった。しかし魏普南北朝期の中華帝国に叙事詩や物語がない。同時代の東西ローマ帝国やサーサーン朝ペルシャにも叙事詩や物語がない。隋唐帝国も同様で、ギリシャ化した東ローマ帝国＝ビザンツ帝国やアッバース朝イスラーム帝国も同様である(「千夜一夜物語」が唯一の例外かもしれない)。

他方、亜周辺で多くの叙事詩や英雄物語が語られている。たとえば、「ベオウルフ」や「ニーベルンゲンの歌」、「ローランの歌」などである。インドでも「ラーマヤーナ」や「マハーバーラタ」が語られている。日本の「古事記」やアイヌの「ユーカラ」も同様である。

中世帝国は理知的な帝国であった。そこが、「中世」のつまらないところである。他方、古代帝国は情緒的な帝国であった。残存数は少ないが、古代帝国は叙事詩や物語が豊かである。多くの人が中世史より古代史を好むのはそのためかもしれない。

3. 4 中世帝国の亜周辺

3世紀の「グレート・リセット」後、世界各地で中世帝国が誕生する。それら中世帝国には三つの共通点がある。まず、政体を軍政と民政に分離し、官僚を武官と文官に分離した。次に国教＝最高法規を定め、版図内の国教会＝統治機構を整備した。最後に、皇帝が金貨や銀貨の鑄造と発行を独占し、財貨＝統治制度を具現した。

軍政と民政の分離、および武官と文官の分離は民政の中央集権化を促進したが、軍政の中央集権化は容易でない。したがって、武官と文官が共有する中心、すなわち皇帝が軍政と民政を統合し調停する。だが、他の中世帝国や亜周辺との敵対関係が調停を困難にする場面があった。

民政を優先しなければならない場面でも、他の中世帝国や亜周辺との対立が激化すれば軍政を優先するしかない。また、官位差が部族差を解消したが、他方、国教が異教や異端と敵対する。そして異教や異端が民衆反乱のテコとなる場面があった(中国の中世帝国＝唐は国教を一元できなかったが、支配層が道教に帰依して官位差を正当化し、官僚機構内の部族差を解消する)。

財貨は土地売買を促進し、奴隷売買を促進した。それにより荘園数が増大し、帝国の税収が低減する。皇帝が改革を断行し、また版図を拡大して税収増を目指す場面もあった。しかし版図の拡大は軍事費の増大につながり、帝国の衰退につながる。

(筆者は、同時代の中南米も同様であったと考えるが、鉄器が使われた痕跡がない。紀元前1230年頃、古代ヒッタイトが崩壊して冶金＝製鉄技術者が世界各地に散る。そして紀元前430年頃からユーラシア大陸各地で鉄器の使用がはじまるが、冶金＝製鉄技術は中南米に伝わらなかった。中南米は鉄鋼石の宝庫であるが、鉄の融点は約1500℃である。木材や石炭を燃やして1500℃以上の温度を得るには高圧空間を具現する技術が必要になる。ちなみに、マヤ文明以前に栄えたオルメカ文明の「鏡」は製錬された鉄の鏡ではない。また、日本に製鉄技術が伝わったのは1～2世紀頃で、かなり遅い)

中世帝国の支配者層(皇族や貴族、聖職者)にとって、土地や奴隷は財産であり、版図外で暮らす民衆は荘園で使役する奴隷の源泉である。したがって、版図外で暮らす民衆は中世帝国から遠く離れて暮らすほうが安全である。

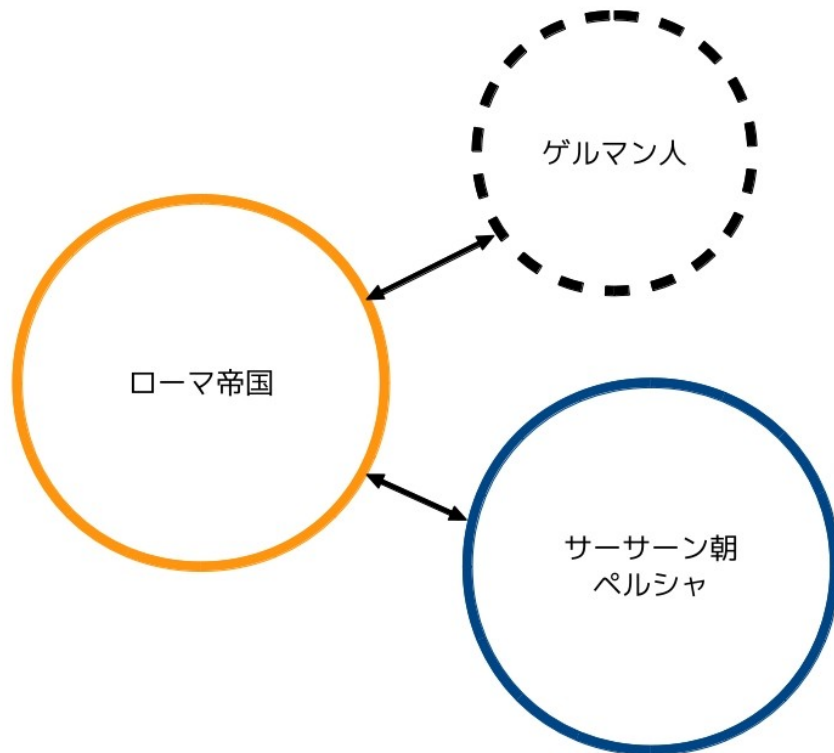
だが、貨幣経済と貨幣クラスが誕生し、財貨と物品貨幣の交換が容易になっている。版図外で暮らす民衆にとって、財貨は制度(ルール)ではなく道具(ツール)である。版図外で暮らす民衆が財貨を求め、中世帝国の近傍で暮らすようになる。中世帝国の近傍が「亜周辺」化し、亜周辺の支配をめぐる争乱が生じた。そして民衆が離散と集合を繰り返す。

中世帝国は、他の中世帝国と敵対し、戦火を交える場面があった。他方、平和条約や不可侵条約を結び戦火を回避する場面もあった。だが、亜周辺と平和条約等を締結しても、戦火を回避できない。なぜなら、亜周辺は支配者層が頻繁に入れ替わるからである。したがって亜周辺は平和条約等を遵守できない。中世帝国と亜周辺の戦火は恒常化した。

(古代帝国のスキームが「中心一周辺一外部」であるとすれば、中世帝国のスキームは「中心一周辺一亜周辺一外部」である。筆者は、柄谷行人氏の著作を通して「亜周辺」という考えを理解し、古代帝国と異質な中世帝国のスキームを発見した。柄谷氏は、ウィットフォーゲルの著作から「亜周辺」という考えを発見されたようだが、筆者の見るところ、ウィットフォーゲルは帝国を古代帝国と中世帝国に仕分けていない。さらに言えば、世界帝国が古代帝国や中世帝国と異なる近代の産物であるとの認識も持っていないように思う。国民国家(あるいは主権国家)は近代の産物である。そして世界帝国も近代の産物である。とはいえ、国民国家は単一言語単一制度空間であるが、世界帝国は多言語多制度空間である。筆者の認識では、古代帝国が中世帝国に変遷し、中世帝国が世界帝国に変遷した。そのような認識がなければ、国民国家＝主権国家と帝国＝世界帝国の「ちがいを」認識できない。ところが、哲学者や社会学者、政治学者や経済学者の多くが、世界帝国＝多言語多制度空間を近代の産物であると認識することなく「帝国」を語っている。おそらくそのため、彼らの帝国と帝国主義の「ちがいの」説明も貧弱である。古代帝国であれ中世帝国であれ、あるいは世界帝国であれ、「帝国」のスキームは国体＝国家体制が政体＝政治体制を内包するスキームで、帝国主義のスキームは政体が国体を凌駕するスキームである。筆者の考えでは、時間軸上で帝国を仕分けられない限り、帝国と帝国主義のそのような「ちがいを」うまく認識できない。そして自由主義や新自由主義と帝国主義や新帝国主義が同じであるかのように見えてしまう場合がある。それについては後述するが、ハンナ・アーレントのように資本＝資本的使用価値の輸出入だけを根拠にして論じる「帝国主義」論は、帝国主義Aか帝国主義Bかの選択を強いられる小国の苦痛を隠蔽し、帝国主義間の交換関係下で生じる戦争問題や難民問題も隠蔽しかねない)

下図(図5)は4世紀後半のローマ帝国と隣接する中世帝国＝サーサーン朝ペルシャ、亜周辺＝ゲルマン人との関係である。

図5 4世紀後半のローマ帝国



4世紀後半、ローマの垂周辺をゲルマン人が支配する。そしてローマ版図内に侵入し、富財を略奪する場面が生じた。

テオドシウス1世の死後、ローマは軍政も民政も含めて政体を東西分割したが、ゲルマン人の「大移動」により、西ローマ帝国が滅亡する。東ローマ皇帝ユスティニアヌス1世は喪失した版図の奪還を目指したが、成果は芳しくなかった。その後ムスリム軍の「大征服」により、東ローマ帝国はシリアとパレスチナ、エジプト、メソポタミア北部とキプロス島やロードス島を失う。

7世紀後半、東ローマ帝国は版図をさらに縮小する。674年、ウマイヤ朝アラブ軍がアルメニア地方とユーフラテス川上流以西を征服してアナトリア高原を超え、コンスタンティノープルを包囲した。東ローマ帝国は「ギリシャの火」で防戦する。678年、ウマイヤ朝アラブ軍は東ローマ軍の反撃と大嵐で艦隊を失い撤退する。

東ローマ帝国は危機を脱したが、その後北方のブルガール人がドナウ川を越えて南下し、東ローマ軍を撃破する。そして681年、ドニエプル川以西からバルカン山脈までの版図(概ねバルカン半島北東部)を占領し、「ブルガリア王国」を建国した。それにより東ローマ帝国の版図が現在のギリシャとマケドニア、小アジア、トラキア地方南部とイタリア半島南端に縮小する。

版図を縮小した東ローマ帝国がギリシャ化およびペルシャ化(すなわち「ヘレニズム化」)するのは必然であったように思う。東ローマ帝国は公用語をラテン語からギリシャ語に変更した。そして官僚機構をサーサーン朝ペルシャ型に変更する。すなわち、すべての属州を軍管区化＝テーマ化し、地方の軍政と民政を一体化する。

(とはいえ、サーサーン朝ペルシャ同様、地方に徴税権を譲渡する場面はなかったし、地方が独自の財貨を鑄造して発行する場面もなかった。したがって、アッバース朝イスラーム帝国のように版図内で王朝が乱立する場面もない)

以後、東ローマ帝国を「ビザンツ帝国」と呼ぶ。属州の軍管区化により、ビザンツ帝国は文官を約3分の1に削減するが、貨幣経済下で荘園数が増大したため、悪化した財政を立て直せなかった。他方、コンスタンティノープルで疫病が蔓延する。この疫病が後の黒死病と同じであったか否かはわからないが、その後各ギリシャ都市で公衆衛生が進展した。

717年、レオン3世が帝位を篡奪し、ビザンツ帝国の皇統がヘラクレイオス朝からイサウリア朝に変遷する。イサウリア朝ビザンツ帝国は再度のウマイヤ朝アラブ軍の侵攻に耐え、ユーフラテス川上流以西を奪還した。だが、イタリア半島で旧西ローマ帝国の帝都ラヴェンナを失い、バルカン半島のマケドニア地方も失う。

ラヴェンナを奪取したのはランゴバルド王国で、マケドニア地方を奪取したのはブルガリア王国である。ラヴェンナ喪失後、ローマ司教区が離反した。その後ローマ司教区はレオン3世のイコノクラスム（聖像破壊運動）擁護に反発し、東ローマ皇帝＝ビザンツ皇帝への臣従を拒否する（筆者の認識では、この不服従が「カトリック教会」のはじまりである）。

とはいえ、イサウリア朝期のビザンツ帝国はウマイヤ朝アラブ帝国がアッバース朝イスラーム帝国に変遷した時期であり、小アジアとユーフラテス川上流以西は概ね安泰であった。741年に即位したコンスタンティノス5世の妃は、ハザール・カガン国王ビハール・カガンの娘チチャクである。ハザール・カガン国との婚姻関係もビザンツ帝国の安寧に寄与した。

レオン3世もコンスタンティノス5世もイコノクラスムを支持した。目的は教会や修道院が保有する荘園の直領化である。コンスタンティノス5世の死後、女帝エイレーネーが即位してイコノクラスムを弾圧するが、その頃のイサウリア朝は「目的」を達成していたように思う。

（ハザール・カガン国は7～10世紀に存在した謎の大国で、西突厥滅亡後にキプチャク草原や北コーカサス地方を支配した。ハザール・カガン国とビザンツ帝国の関係は良好で、ハザール・カガン国とウマイヤ朝アラブ帝国やアッバース朝イスラーム帝国との関係も良好であった。ハザール・カガン国の首都イティルの所在地は今も不明であるが、東西交易の中継地として栄えたようである。ハザール・カガン国はユダヤ教を国教化したことも有名であるが、統治形態が「中世帝国」であったとは考えにくい。ハザール・カガン国はユダヤ教を国教化したが、キリスト教やイスラーム教を排除していないし、キリスト教徒やイスラーム教徒を弾圧した場面もない。筆者は、ハザール・カガン国は少数部族が多数部族を支配した大国で、ユダヤ教を国教化しても最高法規化、あるいは多数部族への「強制」ができなかったと考える。ちなみに、コンスタンティノス5世に嫁いだチチャクはキリスト教に改宗している）

とはいえ、イコノクラスムに反発したローマ司教区＝ローマ教会がビザンツ皇帝への臣従を拒否した影響は大きい。キリスト教会はコンスタンティノープル教会＝ギリシャ正教会とローマ教会＝カトリック教会に分裂した。その後ローマ教皇庁が金利を禁止し、他方、金貨を発行する。

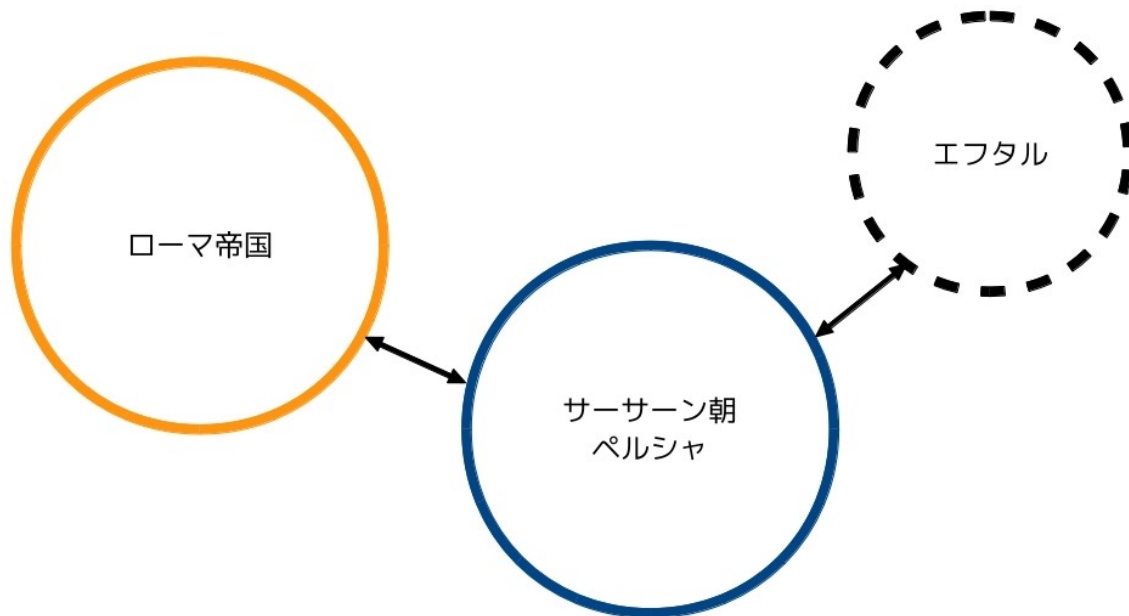
カトリック教会誕生後、後述するカロリング朝フランク王国も誕生したが、フランク王カール1世の死後、フランク王国は分裂する。そのような状況下で、ローマ教皇庁は金利を禁止して金貨を発行した。その後カトリック教会が西ヨーロッパ各地の裁判を担う。

ローマ教皇庁が金貨を鑄造した場所はフィレンツェである。東ゴート王国やランゴバルド王国がイタリア半島を支配していた頃から、フィレンツェは金貨を鑄造していたが、当時のフィレンツェはローマ教皇領である。「広義の近代」の出現期に、この金貨が「フローリン金貨」になり、ローマ教皇の地位が東ローマ皇帝＝ビザンツ皇帝と対等になる。

（ローマ教皇庁の金貨発行が中世カトリック教会の「力」の源泉になる。ローマ教皇庁が金貨を鑄造して発行するまで、ヨーロッパではローマ皇帝＝ビザンツ皇帝が唯一の金貨発行者であった。したがって筆者は、ローマ教皇庁の金貨発行は歴史上の重大事件であると考え、哲学者や社会学者、政治学者や経済学者たちはあまり重視していないようである。そのため彼らは、ローマ教皇を「権威」として語る。すなわち、「統治権者」として語らない。困ったことに、歴史家の中にもそのような人が大勢いる。また宗教学者たちは、ローマ教皇庁の金貨発行は「カエサルのはカエサルに」というイエスの教え（あるいは新約聖書の記載）に反する、と言わない。ちなみに、ユスティニアヌス法は金利を容認している。すなわち、ローマ教皇庁とカトリック教会はかなり恣意的にユスティニアヌス法を運用した。目的は、ローマ教皇がローマ皇帝＝ビザンツ皇帝と対等であり続けるためである。ローマ教皇庁とカトリック教会が権威化するのには「力」を失った後で、すなわち金貨の鑄造と発行を停止した後である。それについては後述するが、ローマ教皇庁の金貨発行停止は「広義の中世」の成熟期の終わりと「広義の近代」の突破期のはじまりで、市場経済のはじまりでもある）

下図（図6）は4世紀後半のサーサーン朝ペルシャと隣接する中世帝国＝ローマ帝国、亜周辺＝エフタルとの関係である。

図6 4世紀後半のサーサーン朝ペルシャ



4世紀後半、サーサーン朝ペルシャの亜周辺＝北東をエフタルが支配する。コラム13で述べたように、エフタルはシャープール1世治世下のサーサーン朝ペルシャと同盟を結び、クシャーン朝を挟撃して滅ぼす。そしてバクトリア地方とガンダーラ地方を占領した。その後エフタルはサーサーン朝ペルシャと敵対し、他方、モンゴル高原と北インドに侵攻する。

(エフタル侵攻後、高車が衰退して滅び、柔然がモンゴル高原を支配する。また、エフタル滅亡後に誕生したグプタ朝も衰退して滅び、ヴァルダナ朝が北インドを支配する)

エフタルの信仰は「天神火神信仰」である。天神信仰は他の遊牧民にも存在したが、火神信仰は存在しない。おそらく、クシャーン朝を挟撃する場面でエフタルの支配層がゾロアスター教を受け入れた。ちなみに、エフタルが滅ぼしたクシャーン朝は仏教国で、エフタル滅亡後に誕生したグプタ朝はヒンドゥー教国である。

(イスラーム教同様、ヒンドゥー教も「広義の中世」の出現期に誕生した宗教である。すなわち、グプタ朝がヒンドゥー教を発明した。イスラーム教の下でゾロアスター教が衰退したように、ヒンドゥー教の下でインドの仏教とギリシャ文化が衰退する。他方、「ラーマヤーナ」や「マハーバーラタ」のようなサンスクリット語の物語が誕生した)

サーサーン朝ペルシャから見れば、エフタルの高車侵攻やグプタ朝侵攻は異教の国への侵攻である。サーサーン朝ペルシャにエフタルの侵攻を制止する宗教上の理由はない。だが、天神火神信仰は「異端」である(筆者は、ゾロアスター教に火葬はなかったと考えるが、エフタルは火葬を行った。ちなみに、隋朝期の中国で浄土信仰が弾圧された原因も火葬である)。

とはいえ、エフタルをサーサーン朝ペルシャや東ローマ帝国＝ビザンツ帝国と同様な中世帝国のひとつとして見ることはできない。エフタルが軍政と民政を分離していたとは考えにくいし、またエフタルで統治制度＝財貨や貨幣経済が具現していたとも考えにくい。サーサーン朝ペルシャから見るエフタルは、東ローマ帝国から見るメロヴィング朝フランク王国のような存在であった。

558年、サーサーン朝ペルシャ王ホスロー1世は突厥と同盟を結び、エフタルを挟撃する。567年、突厥がエフタルを滅ぼし、アム川以東を支配した。

だが、その後突厥がサーサーン朝ペルシャに敵対する。突厥は隋朝期に東突厥と西突厥に分裂したが、西突厥が東ローマ帝国と同盟を結びサーサーン朝ペルシャを挟撃する。

(筆者の憶測であるが、すでに述べたように、サーサーン朝ペルシャはエフタルからバクトリア地方とガン

ダーラ地方の金山を奪取しようとしていた。突厥に対しても同様であったかもしれない。しかし西突厥に対しても同様であったとは考えにくい。なぜなら、サーサーン朝ペルシャから見る西突厥は、「隋唐帝国」である）

すでに述べたが、サーサーン朝ペルシャと東ローマ帝国、およびサーサーン朝ペルシャと西突厥の戦争は20年以上続いた。サーサーン朝ペルシャと東ローマ帝国は疲弊したが、西突厥も疲弊した。641年、西突厥は唐に帰服し、その後北コーカサス地方でハザール人がハザール・カガン国を建国する。

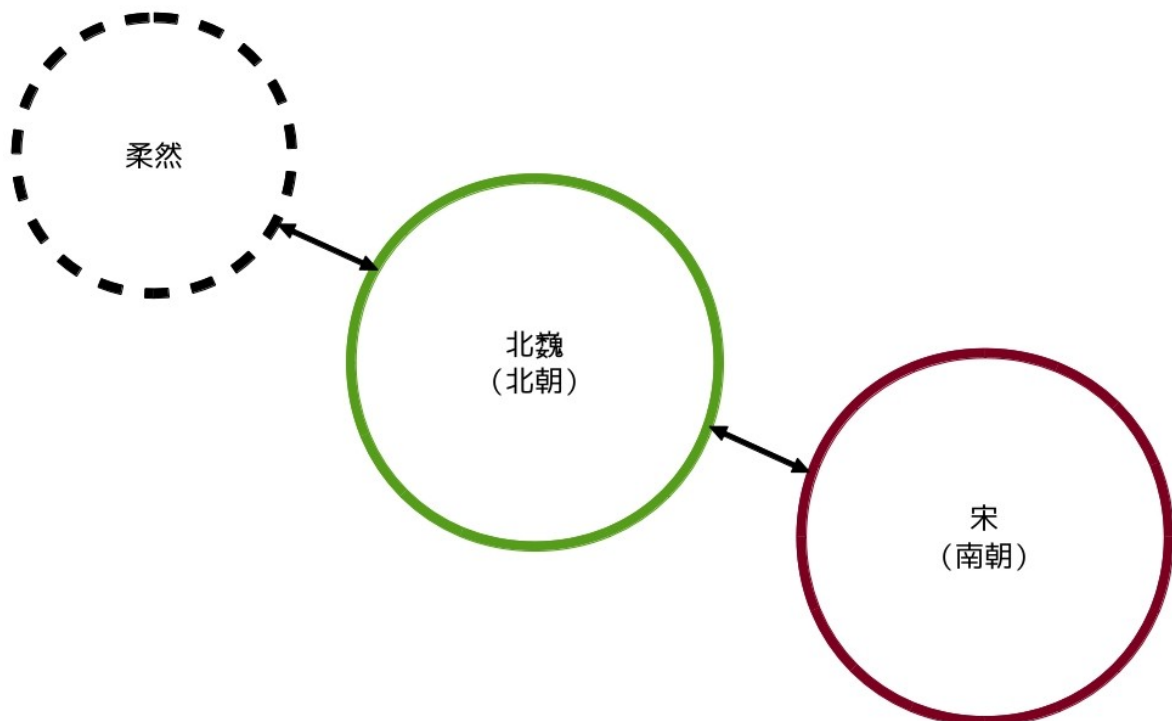
唐の太宗の死後、西突厥は反旗を翻すが、唐の名将蘇定方が制圧する。そして657年、西突厥は唐に再度帰服し、河西節度使の支配下に入る（741年、ウイグルがイリ川以東を支配し、河西節度使が消滅して西突厥が滅亡した。ちなみに、ハザール人は西突厥の末裔であるとの説もあるが、確証がない）。

他方、651年にムスリム軍がサーサーン朝ペルシャを滅ぼす。その後ウマイヤ朝アラブ帝国が各ムスリム共同体を支配する。西突厥が唐に帰服していたため、ウマイヤ朝アラブ帝国に東方の憂いはなかった。ウマイヤ朝アラブ帝国は版図をメソポタミア全土と北アフリカ全域、イベリア半島の大部分、さらに現在のイランと南コーカサス地方、アフガニスタンやパキスタン、中央アジアまで広げる。

750年、ウマイヤ朝からカリフの座を篡奪したアッバース朝がイスラーム帝国を開国する。そして751年、タラス河畔でアッバース朝イスラーム軍と唐軍が激突する。唐軍は敗北し、唐の西域版図がタリム盆地（概ね現在の新疆ウイグル自治区）以東に縮小する。その後中央アジア全域にイスラーム教が広まる。

下図（図7）は5世紀前半の北魏と隣接する中世帝国＝宋、亜周辺＝柔然との関係である。

図7 5世紀前半の中国



5世紀前半、北魏の亜周辺＝モンゴル高原を柔然が支配する。柔然はさらに遼河下流域からイリ川流域までの北方を支配する。そして北魏と敵対した。柔然と北魏の敵対関係は北魏が東魏と西魏に分裂する535年まで続く。すなわち、敵対関係が100年以上続いた。

原因は不明であるが、北魏滅亡後、柔然も力を失う。そして突厥が柔然を滅ぼし、モンゴル高原を支配する。柔然が東方で高句麗と敵対し、西方でエフタルと敵対したか否かはわからない。だが、突厥は遼河上流域＝大興安嶺山脈周辺で契丹と敵対し、イリ川流域でエフタルと敵対した。そしてサーサーン朝ペルシャと同盟を結び、エフタルを滅ぼす。他方、廃仏を断行した武帝下の北周と良好な関係を築く（突厥は現在のトルコ系民族の起源で、生誕地は鉄鋼石が豊富なエニセイ川上流＝バイカル湖北方であったと言われている。突厥は高度な冶金技術を有していた）。

581年に突厥の大族長＝カガン（可汗）に即位したイシュバラ・カガン（汗沙鉢略可汗）は学問を好み、周礼を尊重していた。だが同年、楊堅が北周から帝位を篡奪して隋を開国する。楊堅の行為は周礼に反する。イシュバラ・カガン率いる突厥軍が隋に侵攻した。隋の文帝＝楊堅は軟禁していた北周の皇女＝大

義公主を降嫁し、イシュバラ・カガンを懐柔する。

その後イシュバラ・カガンは柔然とエフタルを滅ぼした突厥の英雄ムカン・カガン(木杆可汗)の子息にアパ・カガン(阿波可汗)の称号を与えたが、他方、彼の粗暴を嫌った。イシュバラ・カガンに嫌われたアパ・カガンはアム川流域でサーサーン朝ペルシャと対峙していたタルドゥ・カガン(達頭可汗)を頼る。アパ・カガンを支持する部族の一部も同行し、イリ川流域からアム川流域の西方で新たな遊牧生活をはじめます。すなわち、突厥のかなりの人口が西遷した。

587年、イシュバラ・カガンが死去し、イシュバラ・カガンの弟ヤブグがヤブグ・カガンに即位する。ヤブグ・カガン(葉護可汗)は隋の支援を得て西征し、アパ・カガンを生け捕る。だが、その後サーサーン朝ペルシャと戦い戦死した(戦闘の規模は不明である)。

ヤブグ・カガンの死後、イシュバラ・カガンの長男トランがトラン・カガン(都藍可汗)に即位する。そして隋に朝貢する。故イシュバラ・カガンの妻、すなわち大義公主が隋への朝貢を怒り、タルドゥ・カガンの支持を得て謀反を企てる。トラン・カガンは大義公主を殺害して謀反を制圧したが、タルドゥ・カガンの反乱は収束しなかった。隋の文帝が仲裁し、二人のカガンを承認して朝貢も承認する。突厥は「東突厥」と「西突厥」に分裂した。

だが、トラン・カガンの弟テリスが隋に接近し、テリス・カガン(突利可汗)を称する。トラン・カガンは激怒し、敵対していたタルドゥ・カガンと和解して隋に侵攻した。しかし隋軍は突厥軍を撃退する。その後隋の文帝はテリス・カガンに「啓民可汗」の称号を与え、宗女＝義成公主を降嫁する。隋の支援を得たテリス・カガンはトラン・カガンを倒し、東方の鉄勒も支配する。他方、隋はテリス・カガンの協力を得て吐谷渾を撃退し、現在の青海省を支配する。その後タルドゥ・カガンも倒す。

(遊牧民の世界では、カガンはすべてのカン(族長)の上位に君臨する「族長の長」である。したがって本来、カガンはひとりである。複数カガンの即位は突厥が隋に翻弄されたためであると言うしかない。その後西遼を建国した耶律大石が「グル・カン(大王)」を称し、テムジンが「チンギス・カン」を称した。そしてテムジン＝チンギス・カンの後を継いだオゴティが「大カン(大帝)」を称する)

テリス・カガンの死後、テリス・カガンの長男シヒツがシヒツ・カガン(始畢可汗)に即位する。そして故テリス・カガンの妻、すなわち義成公主を娶る。シヒツ・カガンは隋に朝貢したが、煬帝が三度目の高句麗遠征に失敗した翌年(615年)、隋に侵攻する。急遽隋軍が結集したため、シヒツ・カガンと東突厥軍は撤退したが、その後煬帝は江南の地で遊興に没る。

617年、唐の高祖＝李淵が長安を目指して出陣する。シヒツ・カガンは李淵に軍馬を送り援軍も派兵した。そして翌年、李淵が唐を開国すると特使を送り賛えた。だがその翌年(619年)、シヒツ・カガンは死去する。シヒツ・カガンの死後、テリス・カガンの次男ショラがショラ・カガン(処羅可汗)に即位した。そして故シヒツ・カガンの妻、すなわち義成公主を娶る。翌年(620年)、煬帝の皇后であった蕭氏と煬帝の孫の楊政道、そして隋の文官たちが東突厥に亡命する。しかし同年、ショラ・カガンは唐に朝貢する。その後ショラ・カガンは死去する。

証拠はないが、シヒツ・カガンもショラ・カガンもおそらく義成公主に殺害された。だがショラ・カガンの死後、テリス・カガンの三男イリグがイリグ・カガン(頡利可汗)に即位するが、彼も義成公主を娶る。しかしシヒツ・カガンやショラ・カガンとちがい、イリグ・カガンは唐と敵対する。そして626年、李世民＝太宗が即位した直後、大軍を率いて長安に進軍する。だが東突厥軍は引き返す(すでに述べたが、太宗は莫大な富財をイリグ・カガンに与えたようである)。

その後寒波がモンゴル高原を襲い、東突厥は疲弊する。そして鉄勒が離反し、630年、唐の名将李靖が東突厥を滅ぼす。イリグ・カガンと義成公主は捕縛され、義成公主が処刑された。東突厥滅亡後、唐の太宗はテングリ・カガン(天可汗)を称し、モンゴル高原を支配する。その後西突厥のカガンも唐に臣従する。

歴史家たちは、581年にイシュバラ・カガンが「カガン」に即位し、630年にイリグ・カガンが捕縛されるまでの東突厥を「第一可汗国(あるいは第一突厥帝国)」と呼んでいる。しかし東突厥が軍政と民政を分離していたとは思えない。また、国教も不明で、統治制度＝財貨や貨幣経済が具現していたとも思えない。

(イシュバラ・カガンの前のカガン＝タトパル・カガンが仏教に皈依したとの記録があるが、仏教が突厥の国教であったとは考えにくい。仏教が国教であったとすれば、イシュバラ・カガンが周礼を尊重する場面はない。廃仏を断行した北周と良好な関係を築くこともできなかったと思う)

にもかかわらず、東突厥に中世帝国らしさがあるとすれば、義成公主の存在が大きい。義成公主の父母は不明である。彼女は隋の女官だったかもしれない。

歴史家たちは、義成公主が歴代カガンに嫁いだのは、突厥にレビトラ婚(逆縁婚)の慣習があったためである、と論じている。だが、レビトラ婚の慣習があったとしても、二人の兄を殺害したかもしれない高齢の女性を理由もなくイリグ・カガンが娶るとは考えにくい。筆者には、義成公主が意図的にレビトラ婚を行ったような気がする。彼女は、長安を中心とする関中の地を奪還し、隋朝の再興を目指していた。現実には、彼女は東突厥に亡命した楊政道を「隋王」に擁立している。義成公主は「女忠臣義士」であった。唐は彼女を処刑したが、楊政道と蕭氏を庇護する。おそらく、義成公主が彼らの助命を嘆願した。

モンゴル高原の東突厥＝第一可汗国は630年に滅ぶ。そして吐谷渾が勢力を回復し、現在の青海省を再度支配する。他方、633年にソンツェンガンボがチベット高原で吐蕃を建国する。

634年、ソンツェンガンボが皇女の降嫁を唐に要求したが、同年、唐の名将李靖が吐谷渾を征服する。

太宗はソンツェンガンボの要求を拒否し、支配下の吐谷渾に皇女を降嫁した。638年、怒ったソンツェンガンボが吐谷渾に侵攻する。吐谷渾は親吐蕃派と親唐派に分裂し、唐はかろうじて吐蕃軍の侵攻を阻止する。641年、唐は吐蕃に皇女＝文成公主を降嫁した。

すでに述べたように、唐は644年に高句麗遠征を強行した。当時の唐に軍を両面展開する余裕はない。また軍の両面展開は戦略上の下策でもある。しかもチベット高原の支配より遼河流域支配のほうがはるかに重要である。したがって、文成公主は義成公主と同様な役割を担っていたように思う。文成公主は役割をはたした。文成公主が降嫁した後、唐と吐蕃の関係が改善する。650年、ソンツェンガンボが死去し、マンソンマンツェンが即位するが、文成公主が健在であったため、唐と吐蕃の良好な関係が続く。

だが668年に高句麗を滅ぼした後、唐は鴨緑江を越え韓半島を支配しようとする。そのため唐と新羅が戦争状態に陥る。他方、670年に吐蕃軍が安西四鎮(亀茲等)に侵攻し、天山南路＝南シルクロードを支配する。軍の両面展開を強いられた唐は新羅に敗北し、吐蕃にも敗北する(文成公主は存命であったが、おそらく高齢のため、吐蕃の政治や軍事に関与できなかった。彼女は680年に死去する)。

710年、唐の金城公主が吐蕃に降嫁する。そして青海湖(青海省のほぼ中心にある湖。広さは琵琶湖の約8.5倍)を唐と吐蕃の国境にする。吐蕃との関係を修復した唐は751年に南詔国(現在の雲南省および四川省の一部を支配していた王国)に侵攻したが、南詔国軍は唐軍を撃退し、その後吐蕃と同盟を結ぶ。754年、吐蕃と南詔国の連合軍が唐の大軍を撃破する。763年、安史の乱で疲弊した唐に吐蕃軍が侵攻した。吐蕃軍は概ね現在の青海省と甘粛省を支配し、長安を一時占領する(コラム15)。

(唐と渤海国との関係も、唐と突厥や吐蕃、南詔国と同様であった。唐と当時の韓国や日本との関係も同様である。そして突厥や吐蕃同様、唐との関係の下で当時の韓国や日本、渤海国に政変が生じている。韓国は、新羅が韓半島を統一し、その後「後三国時代」に突入する。日本では奈良で平城京が誕生し、その後京都で平安京が誕生した)

コラム15: 突厥第二可汗国

唐が新羅に敗北し、吐蕃に敗北した後、東突厥が再興する。682年、クトウル(長安に進軍したイリグ・カガン＝頡利可汗の末裔であるらしい)が自身を「イルティリシュ・カガン」と称し、部族を率いて河北に侵入した。その後中国北辺各地に侵入する。

イルティリシュ・カガンの死後、彼の弟が「カプガン・カガン」と称し、中国北辺への侵入を繰り返し替えた。693年、唐はカプガン・カガンを懐柔する。698年、カプガン・カガンは唐に農地の提供を求め、皇族との縁組も求める。しかし当時の唐は則天武后が即位し、国号を「周＝武周」に改めていた。則天武后は皇族のひとりを送るが、李氏ではなく武氏の縁者であった。

だが、カプガン・カガンが求めていたのはテングリ・カガン(天可汗)すなわち太宗＝李世民の末裔である。テングリ・カガンの末裔を得なければ、カプガン・カガンは残存する西突厥や他の部族を束ね誰もが認める「カガン」に即位できない。狡猾な則天武后がカプガン・カガンを欺いた。カプガン・カガンは唐朝再興を旗印にして長安に進軍し、各地で武周軍を撃破する。急遽、中宗が皇太子に復位し、カプガン・カガンは引き返したが、唐朝再興の大義は大きかった。カプガン・カガンは部族の結集に成功する。

705年、則天武后が死去する。711年、唐はカプガン・カガンに皇女＝金山公主を降嫁した。唐と東突厥の関係は改善するが、その後東突厥の西南でイスラーム勢力が台頭し、東北方面でウイグルが台頭する。そして745年、ウイグルが東突厥＝第二可汗国を滅ぼし、モンゴル高原を支配する。

(則天武后は、自身を「天皇(あるいは天后。おそらく「天可汗」と同じ意味)」と称し、カプガン・カガンに遵法を命じたが、カプガン・カガンは法より掟に従った。隋の文帝＝楊堅と戦ったイシュバラ・カガンもそうであったが、筆者には「中原の民」より「草原の民」のほうが儒教精神が強い気がする。国教を一元できなかった隋唐帝国期の中国は仏教が「法」で儒教が「掟」であった。ちなみに、則天武后は705年に死去するが、「天皇」の称号が登場する日本書紀が完成したのは720年で、女帝＝元正天皇の代である)

ところで、745年にウイグルが東突厥を滅ぼし、750年にアッバース朝がウマイヤ朝からカリフの座を篡奪し、755年に安史の乱が勃発した。750年前後に生じたそれら三つの事件につながりはない。だが三つの事件は「広義の中世」の出現期の終焉を示唆している。中世帝国も亜周辺も肥大化した貨幣経済を刷新する新たなスキームの構築に迫られていた。770年前後から、「広義の中世」の突破期がはじまる。